ケニアへ行って

梅本　和佳

ケニアの CORE のオフィスがあるエルドレットへ行くには飛行機に 3 回乗った。乗っている時間が長く、乗り継ぎも長かったため、不安が募るかと思いきや、まったくそんなことはなかった。それはふわっとくるケニアへの期待、楽しみな感情がそうさせていた。一緒に行った友だちとその感情を分け合っていた。エルドレットへ着き、ケニアの時間で 19：00 前だったけれど、標高が高いため少し寒いくらいだった。日本語が全く通じなくなり、周りの黒人の比率が増えるにつれ、アフリカに来たことを実感していた。

喜田さんが車で迎えに来てくれて、オフィスのあるケンモサビレッジまで行くその道中に見える景色、道路、空気がここは知らない土地だと感じさせた。大草原、スピードを出しすぎないように道路が途中で隆起している、アスファルトがはがれているところがたくさんあり、それをよけながら運転する、空気が乾燥してすがすがしいなどなど。しかしだんだん暗くなってあまり見えなくなっていった。ケンモサビレッジに入るのにゲートをくぐることが衝撃だった。とても守られている感じがした。しかし、それだけ危険なのかと少しふあんになった。よく見るとゲートの奥に住宅があるのは当たり前でたくさんゲートがあった。その日はとても気持ち良いベッドで熟睡した。

次の日は私たちの前に来ていた学生さんたちがホームステイした村の人と会った。とても楽しそうに学生の名前を言っていた。とてもいい出会いだったとすぐわかった。帰り道に雹が混じる雨に遭い、車が途中でスタックした。雨が道にたまり、道路が泥状になったところへ車の右側のタイヤが入り込んで出られなくなったのだ。前でエンジンの調子がおかしいのか止まっている車をよけようとして路肩の土にはまったのだけれど、ケニアで走っている車がぼろぼろなものが多いことは見てわかるくらいだった。それに加えてこんな道だとすごいテクニックか運が必要になるなと思った。その後行ったケリオバレーの眺めはとても気持ちが良く、爽快だった。そこで景色以外で私が驚いたのは料理の量で、ワンプレートに牛肉、サラダと山盛りのポテトが出てきた。横の Biwott の皿にはポテトの代わりに大量のチャパティがつんであり、巨大ミルフィーユのようだった。そして、後ろで行われているビュッフェで自らそれ以上の量を皿に持っているケニアの女性を見た時、彼らの体格のよさの理由がわかった。一日目はケニアの景色になれることで精一杯だった。

二日目は朝ごはんの後にゲートの所まで行こうと散歩していたらケンモサの中にあるキオスクにいた人と知り合いになり、その隣のレストランの人とも友だちになった。この時自分の英語力の無さにもどかしさを感じ始める。その後 Moi teaching and referial hospital で行われている AMPATH というプロジェクトを見学に行った。そこで Ms.Bornice が病院の中や施設の裏の畑やビニールハウス、食糧を提供する施設などに連れて行ってくれて、言葉を多く使って説明してくれたが、わかったのは 5 割程度だった。前もって喜田さんが AMPATH の概要を教えてくれていなければ、かなり貴重な経験をさせていただいているの

にほとんどわからず終わってしまうところだった。ここで英語力の必要性を強く感じた。今の私は無力で無知で、感じることしかできなかった。私たちがほとんど英語を理解できないということがわかっているので、一緒についてきてくれた Biwott が丁寧に聞いてくれてメモしてくれて、昼食を食べるときに何か質問はないかと言ってくれたことが、嬉しかった。ケニアには 200 万人の AIDS 患者がいて、AMPATH には 10 万 5 千人の AIDS 患者がいることや、HIV 陽性だとわかった時に、どのような流れで患者が施設を回っていくのかなど、丁寧に教えてくれた。そこで私がした質問は Ms.Bornice が何度も TV、TV と言っていたけれど、テレビのこと？というもので、正しくは Tuberculosis　Virus(結核ウイルス)の略だったことを知り、とても勉強になった。

三日目は CORE が関わるであろう大きなプロジェクトの序盤戦を見学、同行させてもらい、ケニア政府の方々に自己紹介までした。とても緊張して、このときにスワヒリ語の必要性も強く感じた。

四日目から三日間カゾキ村にホームステイをした。道作りではなく、今は池を掘っているということで、池掘りを手伝った。カゾキの人たちは若者はもちろん孫がいる人まで力強く池を掘っていた。初めてウガリを食べ、初めてカラバシで作ったヨーグルトを飲んだ。ケニアに住んでいる人の実際の生活スタイルで過ごすことに期待と不安が同時にやってくる。一人になると日本語は全く通じないので少ない英語力をフル活用し、相手の話を聞き、自分の意見を言った。私のホームステイした家は朝ごはんを外で食べ、ご近所さんが集まったり、通ったりすると挨拶する所で、それがとても素敵だと思った。Primary　school や dispensary の見学もさせてもらい、たくさんの人に会った。みんな突然の訪問にもかかわらずとても親切に説明してくれて、案内してくれた。私は自分にできることを考えだすようになっていった。実は池掘りはほとんどせず、毎日のほとんどをご近所さんめぐりで過ごした。池掘りのメンバーである人の家を一軒ずつ訪ね、挨拶する。土地が広くお隣さんが遠いのも理由の一つだが、ホームステイ期間が短すぎて全員回り切れなかった。また、20 分で〇〇さんの家へ行き、その後 20 分で〇〇さんの家、そして帰ってきてご飯作るの手つだってねと言われて出かけ、帰ったのは 1 時間 30 分後だったりした。チャイをいただきながら話に花が咲くのだ。宗教の話、お酒の話、ご近所さんの話、近況など。スワヒリ語でほとんどしゃべっているのだけれど、今は何をしゃべっていたんだよと教えてくれるのが、本当に親切だなと思った。ホームステイ先にはいつも誰か家族以外の人がいて、とても仲が良く楽しそうにしゃべっていた。彼らにスワヒリ語を教えてもらい、私は日本語を教える。また、つたない英語でいろいろ話していく中で、宗教観の違いや、結婚観の違いが興味深かった。みんな優しくて、フレンドリーで、明るかった。そして何より自分たちの生活を良くする気持ちが強いことがわかった。

私は看護師を目指す大学生だと自己紹介をする。そうすると、ずっと胃が痛い、病院へ行っても薬を飲んでも治らない、どうすればいいのか？何という病気なのか？何か薬をもっていないか？など、体調不良の相談をたくさんされた。まだ学生だからというのは言い

訳で、自分の知識の無さを痛感した。加えて自分の英語力では謝罪の表情しかできない時もあった。

日本に帰ってきて思うケニアのことが嘘のように日本のみんなは変わっていなかった。今、この瞬間を同じ地球で生きていることをこれほど意識しことはなかった。日本の生活をしているときに、ケニアの生活が何度も思い出されて、苦しくなった。どちらがいいとか悪いとかではなくて、ケニアは物や人が廻っていたなと思う。ケニアはより地球と一緒に暮らしていたと、そう思った。いろんなことがありすぎて、とっても充実していた。私は喜田さんの、生まれたからには自分の存在感出さんかいという言葉を胸にしまって日本に帰ってきた。それは今の私には重たい言葉で、自分の人生だと強く意識させられた。

本当にたくさんの方々の協力でとても安全で楽しく多くを学ぶことができたと思う。私の次へ向かう力の原動力になっていく大きな大きな経験だったと思う。